

巻 頭 言



「みなと」の本質と「みなと」屋の気概への思い

鈴木 徹
北海道開発局 港湾空港部長

はじめに

北海道は島嶼の沖縄県を除けば四方を海に囲まれた唯一の都道府県であり、みなとの役割を実感しやすくまたみなとが核心的に重要な地域であると思われまゝ。離島住民の方々日々の暮らしの中でみなとは身近であり必要不可欠なものであることを実感されていますが、実は北海道も、一部陸路（鉄道トンネル）で本州と結ばれているものの、全体としては未だに「大なる離島」であるという側面もあるかと思われまゝ。この「大なる離島」が他地域、海外との交流を行う上でみなとの役割は重大であり、今後も北海道総合開発の基盤として、新たな時代にも対応しつつ、みなとが発展、進化していく必要があります。

「みなと」の本質、「みなと」を考える上での基本認識

ここでいう「みなと」とは海の港（港湾、漁港）と空の港（空港）を包括した概念で考えています。北海道の長く過疎な海岸線を巡っていると所々に街や集落が存在し、何故そこに存在するのかと改めて思えば、そこには必ずと言っていいほど「みなと」があります。

『「みなと」とは目の前に（頭上に）海（空）があるだけでは得られない恩恵を人々の住む陸域にもたらすために人間が生み出したインフラである』という言い方が出来ると思われまゝ。その本質的な恩恵は、単に海を（空を）眺められるだけでなく、その「みなと」によって海に（空に）交流の路が開

かれることだと考えまゝ。また、海の幸を陸域に揚げる事が出来るようになるのも主たる恩恵でありまゝ。当然、その恩恵の大きさは、みなとの能力（対応出来る船の規模、対応可能な荷役、荷さばき等）が上限になります。また、その能力の中には単に入出港できる、寄港できるということだけでなく、利用時の効率性も重要なファクターとして含まれ、その効率性がそのみなとを利用する産業の国際あるいは地域間競争力や最終消費者の負担するコストに直結します。それぞれの地域に応じてみなとの能力を確保していくことが、我々「みなと」屋の基本的な使命であると考えまゝ。

「みなと」はその立地する自然環境やその時々社会経済環境に影響されて姿形や機能が決まり、変化していくものなので、人と同様、全く同じみなとは2つと存在しない個性あるものであり、その時々の人々の意思によって築かれ育まれるものであることが、極めて人間くさい存在だと思われまゝ。地形や海象などの影響を受け、時代の変化に応じて再開発も行われる海の港はその特性が顕著ですが、比較的、航空機の発着のための機能に特化している空の港でも戦前からの歴史の変遷を経たものや拡大拡張を繰り返してきたものは独自の姿形となっています。これからの若手諸君にはみなとの重要性はもちろんですが、みなとの人間くさい面白さにも気づいて頂きながら日々の業務を担って頂ければと思われまゝ。

北海道の「みなと」の目指す方向性と役割

北海道のみなとの果たす役割は、地域のため

のものではあるが、国、北海道開発局としてはそれだけで無く国益のための北海道開発でもなければなりません。同じ管轄区域を持つ地方自治を担う北海道庁の行政は道民ファーストであることが是であることに対して、北海道開発局はそれだけでは不十分です。

国土の主要部として北海道が国益への貢献として期待されるのは、まず、風力をはじめとした持続可能な国産エネルギーと一次産業による食料の供給基地としての役割であろうと思います。かつて国産エネルギーたる石炭を供給した北海道が再びその役割を担う時代がやってくる、食糧自給率、食料安全保障の問題から北海道での食料生産と供給は一層重要となってくる、みなとがそれらのサプライチェーンを支えるのが基本的な方向性であると考えます。また、コロナ禍によりダメージを受けたインバウンドの回復などを見据え、観光資源豊かな北海道はこれからの外貨を稼げる観光振興を図る上で引き続き重要な地域であり、空と海からの受入環境を向上させていくのも重要な方向性であると考えます。

そのほか、北海道総合開発という看板に拠らずとも基本的に重要な、国力の源泉となる地域の基幹産業、成長産業を支えるみなとづくり、防災・減災、国土強靱化のためのみなとづくり、脱炭素社会を目指すためのみなとづくりもこれからの基本的な方向性と考えます。

さらに、以上の方向性に沿ったみなとづくりを行う上での北海道として重要な視点の一つが、広域分散型の広大な国土を持ち、他方で国境離島を有する北海道を見た場合に一層実感されるのが地方港湾や離島航路の役割の大きさだと思われま

「みなと」屋の使命、気概

日々、みなとの改善や保全に関わっている人々を「みなと」屋と呼ぶならば、みなと屋の基本的な使命は、その時々々の港の改善に従事することも

もちろんですが、今のみなとをより良いものに改善して次世代に引き継いでいくことが究極の使命だと思われま

すし、そのために尽くそうとすることがみなと屋の気概であろうと思われま

す。さらに、「危機管理」という面に目を向けると、他の分野とも共通する自然災害等突発的かつ衝撃的なリスクへの備えと対応での一翼を担うというのも当然ですが、みなと屋ならではの危機管理として、いわゆる「ゆでガエル」的な国力の低下リスクへの対応があるかと思われま

す。船舶大型化や物流効率化へ対応する等へのみなとの能力、効率性、サービスレベルの相対的低下は国力の低下に繋がります。日々みなとの改善ニーズに対応していく業務は、見方を変えれば、国や地域が「ゆでガエル」にならない様に将来を見越してみなとを地道に改善することであり、重要な危機管理であるともいえるのではないで

しょうか。実感しにくい経年変化によるリスクに対する危機管理を担っていく意識もみなと屋の気概とすべきと思われま

おわりに

若干観念的かつ私論じみて申し上げた上記の使命と気概のもと、私たちは3つの現場としっかり向き合っ

て仕事をしていく必要があります。「現場」といえばとかく工事の現場との認識になりがちですが、みなと屋にとっての現場には、①利用（改善ニーズのある場）、②整備・保全（改善を実施する場）、③関係者調整（企画と実施の各段階で行政的調整の場）の三つの場があり、それら全てを「現場」と認識することが必要と思われま

す。今後の組織内外での中長期的な担い手確保も大きな課題ですが、多くの多様な担い手と連携してみなとの改善、危機管理に努めて参りたいので、関係各位のご理解とご協力をお願い申し上げます。

（なお、本筆は先輩諸氏やベテランには「釈迦に説法」であるのは承知の上で、どちらかと言えばこれからのみなと屋を担っていただく読者に向けたものとしてご容赦下さい。）